平成26年広島土砂災害被災者の反実仮想から見た住民の防災意識

Disaster Prevention Awareness from the Viewpoint of Counterfactual Thinking of Suffers due to the 2014 Sediment-Related Disaster in Hiroshima City

伊藤 大矩[1]，○藤本 一雄[2]
Hironori ITO[1] and Kazuo FUJIMOTO[2]

[1] 刈谷市役所 危機管理課(元 千葉科学大学 危機管理システム学科)
Crisis Management Section, Kariya City Office
[2] 千葉科学大学 危機管理システム学科
Department of Risk and Crisis Management System, Chiba Institute of Science

The purpose of this study is to analyze the counterfactual thinking of suffers due to the 2014 sediment-related disaster in Hiroshima city to reveal the difference between resident's consciousness of the dependent on government response and the independent attitude about natural disaster. The counterfactual thinking of suffers narratives are collected from newspaper articles. We analyzed the subject in the sentence of the counterfactual thinking from 31 suffers narratives. The result shows that the suffers who lost their family members tend to blame themselves, whereas the suffers who lost their property or daily life tend to blame someone or something else, especially government.

Keywords *: counterfactual thinking, dependent on government response, independent attitude about natural disaster, 2014 sediment-related disaster in Hiroshima city*

１．はじめに

個々の住民単位の防災行動が不十分である原因として，防災対応に関する行政依存意識が指摘されている [1]．それを示す例として，被災住民から「避難勧告さえでていればこのような被害にならなかった」との声が聞かれることを挙げている [1]．このような「もし～だったら(れば)，･･･だっただろう」といった事実に反して想像することは「反実仮想」と呼ばれ，前述の「避難勧告さえでていれば」は行政依存意識を示す反実仮想と言えるであろう．これに対して，阪神・淡路大震災被災者の「もっと丈夫な家に住んでおけば」[2]や東日本大震災被災者の「地震が起きてすぐに帰れば間に合ったのかと思う」[3]のように当事者意識を示す反実仮想の声も聞かれる．

平成 26 年 8 月 20 日に広島市北部で発生した土砂災害では，全壊 133 棟の物的被害，死者 74 名の人的被害を生じた．この災害に対して，広島市長は「避難勧告が出ていればどこか安全なところに行けたかもしれない」との反実仮想をしており，その他の被災者もさまざまな反実仮想をしていることが予想される．

そこで，本研究では，災害後に行政依存意識を抱く被災者と当事者意識を抱く被災者の違いが何によって生じるのかを明らかにするために，平成 26 年広島土砂災害の被災者の声(証言)のうち反実仮想に着目して，基礎的な検討を行った．

２．使用したデータ

広島土砂災害被災者の証言は，新聞記事(全国紙 4 紙，地方紙 2 紙)から収集した．使用した新聞は，紙媒体が産経新聞，読売新聞，毎日新聞，山陽新聞(岡山県)の 4 紙であり，データベースが朝日新聞と中国新聞(広島県)の 2 紙である．証言を収集した期間は，紙媒体が 2014 年 8 月 21 日～9 月 20 日であり，データベースが 2014 年 8 月 21 日～10 月 31 日である．紙媒体に関しては，広島市立図書館(中央図書館)の参考閲覧室において記事を閲覧し，反実仮想を含む証言を探した．データベースに関しては，「広島&土砂災害&たら」，「広島&土砂災害&れば」で記事を検索して，反実仮想を含む証言を探した．

なお，本研究では，住民(被災者)の立場での証言を対象としているため，収集した証言の中から，市長，消防局員，町内会長などの住民を守る立場にある者の証言は除外した．以上の結果，住民 31 名の証言を集めることができた．

３．検討結果

証言 31 件に含まれる反実仮想「もし○○が～だったら，･･･だっただろう」から，○○の部分を主語として読み取り，その主語が「自分」と「他者」のいずれであるかによって分類した．以下では，反実仮想の主語ごとに，どのような特徴が見られるのかについて検討した結果について述べる．

(1) 反実仮想の主語が「自分」の場合

主語が自分である反実仮想「もし自分が～だったら」は 13 件であった．そのうち 5 件について，証言者の性別・年齢，実際に経験した事態・結果，喪失対象，反実仮想を表 1 の No.1～5 に示す．13 件すべてに共通する点は，犠牲者(生命の喪失)が原因で反実仮想をしている点である．具体的には，13 件のうち 9 件は家族(2 親等まで)を喪っており，残りの 4 件は近所の住民や職場の同僚を喪っていた．さらに，家族が犠牲者となった 9 件のうち 6 件では，災害時に近くの場所(同じ家の中，近所など)にいた家族が亡くなっていることが特徴である．

以上をまとめると，災害時に近くの場所にいた家族や空間的・心理的に近い人を喪った場合，「もし自分が～していたら，もっと良い結果になっていただろう」といった反実仮想(事後的な当事者意識)を抱くことが多いと言え

表１　広島土砂災害被災者による反実仮想を含む証言

No	性別	年齢	事態・結果	喪失対象	災害時の犠牲者との距離	反実仮想	主語
1	男性	65歳	自宅2階にいた本人は部屋ごと約10m流されるも，必死に泥からはい出し無事だった．しかし，1階で寝ていた妻（63）は行方不明．2日後，土砂の中から遺体で見つかった．	死亡：妻	同じ家の中	「2階に寝かせていれば」，「市の避難勧告が遅れたのどうのって，最終的には自分の判断が甘かった」，「早めに逃げる決断をしていればよかった．なぜ逃げようって言わんかったのか……．」	自分
2	女性	37歳	土砂が家屋に流れ込み，子供2人(長男と三男)を失った．	死亡：子ども2人	同じ家の中	「あのときもっと早く逃げようとしていたら」「山側の部屋を寝室にしていなければ」．（中略)なんであんなところに家を建てちゃったんだろう．（中略)壊れた家なんて，家具なんてまた買えるけど，2人はもう取り返しのつかないことになってしまいました．	自分
3	女性	77歳	豪雨の中，「危ないから来るな」と言い残して自宅を出た夫は，増水した川に流され，約17km下流で遺体で発見された．	死亡：夫	同じ家の中	「ついて行けば助けられたかも」と悔やむ．「一緒に行っていれば，落ちそうになっても引き上げられたかもしれない」	自分
4	女性	48歳	建設会社・社員の夫は，2階の一室が構造上、自宅で1番安全なことを知っていた．自宅が土砂に襲われた時，日頃からそう聞かされていた本人と三女は長女の部屋へ逃げ込んだが，山側に部屋があった夫と次女は逃げ遅れて土砂に巻き込まれた．	死亡：夫・次女	同じ家の中	「あのとき，2人をたたき起こしてでも避難させていれば」，「せめて次女を起こして避難させていれば」と悔やんでいる．	自分
5	男性	35歳	隣家の子ども2人(11歳，2歳）が土砂に巻き込まれ、命を落とした。隣家を襲った土砂は、2階建ての1階天井まで埋め尽くした。	死亡：近所の子ども2人，損失：自宅	隣家	「罪滅ぼしではないけれど。もっと強く避難を勧めていたら…」	自分
6	男性	80代	土砂災害発生から約19時間後が過ぎた午後10時ごろに消防隊員に救出される．			「勧告があれば外に逃げられた」	他者（行政）
7	男性	34歳	広島県の「崖条例」の適用対象外であった家の兄弟2人が犠牲になった(本人の家は2軒隣で対象であった)．	死亡：近所の子ども2人	2軒隣り	「兄弟が犠牲になったお宅も，もし条例の対象になっていたら命は助かっていたかもしれない」	他者（行政）
8	男性	77際	娘と孫は，土砂に押し流されて全壊したアパートに住んでいた。	死亡：次女・孫	被災地外	「避難勧告がもう少し早く出ていれば」「せめて土地の危険性を教えてくれていれば」	他者（行政）
9	男性	69歳	自宅は全壊，車や家具も流された．	損失：自宅(全壊)，車，家具		「もっと早く避難勧告を出してくれていれば，みんなで逃げられた．戸別訪問するなどして救える命があったはずだ」	他者（行政）
10	女性	26歳	自宅に土石流が押し寄せた．	損失：自宅，車？		「もっと早く避難勧告が出ていたら，車が出せるうちに家から離れた」	他者（行政）
11	男性	66歳	元町内会長で，3年前から砂防ダムの早期建設を要望していた．	喪失：日常生活？		「4年前，近くを流れる川に大量の石が流れ込んだことがあり，土砂崩れがあるのではないかと心配していた．ダムがあれば被害を減らせたかもしれず，残念だ」	他者（行政）
12	女性	75歳	息子の自宅1階に土石流が押し寄せた．息子の遺体は自宅から20mほどの場所で発見された．自宅の2階はほぼ無傷で残っていた．	死亡：息子	被災地外	「家が崩れると思って慌てて外に出たんじゃろう．2階に避難していら，息子は助かったかもしれない」	他者（犠牲者）

る．なお，これらの中には，「サバイバーズ・ギルト」による反実仮想も含まれると思われる．

(2) 反実仮想の主語が「他者」の場合

主語が他者である反実仮想「もし誰か(何か)が～だったら」は 18 件であった．そのうち 7 件の情報を表 1 の No.6～12 に示す．反実仮想の主語を具体的にみると，避難勧告：7 件，警戒区域・崖条例の指定(土砂災害の危険性)：6 件，砂防ダム：2 件，犠牲者本人：2 件などであった．これらのうち，「避難勧告」「土砂災害の危険」「砂防ダム」は受動態の主語(行為を受ける対象)であるため，文脈から能動態の主語(行為主体)を読み取れば，「他者」のほとんどが行政であると言える．

つぎに，これらの反実仮想をもたらしている原因をみると，主語が自分の場合と同様に，死亡(生命の喪失)：9 件が多いものの，その他に，財産の喪失(家屋・車の流出など)：6 件，日常生活の喪失(避難所での生活など)：6 件も含まれていた．なお，死亡(9 件)のうち 5 件では家族を喪っていたが，主語が「自分」の場合との違いは，そのうち 4 件が災害時にその家族(犠牲者)と離れた場所にいたことが挙げられる．

以上をまとめると，災害時に離れた場所にいた家族を喪ったり，財産・日常生活を失ったりした場合，「もし行政が～していたら，もっと良い結果になっていただろう」といった反実仮想(事後的な行政依存意識)を抱くことが多いと言える．この結果を敷衍すれば，災害によって何も喪失していない住民(被災者以外)も，防災対応に関して行政依存意識を抱きやすいことが類推される．

４．まとめ

本研究では，平成 26 年広島土砂災害での被災者の証言を新聞記事から収集し，その証言 31 件に含まれる反実仮想の主語に着目して，被災者が防災対応に関して回顧的に抱く当事者意識・行政依存意識について検討した．その結果，災害時に近くの場所にいた家族や空間的・心理的に近い人を喪った被災者は，それを自分の責任と考える(当事者意識を抱く)のに対して，離れた場所の家族を喪ったり，財産・日常生活を失ったりした被災者は，それを他者，特に行政の責任と考える(行政依存意識を抱く)傾向があることを確認した．

今回の結果を踏まえて，個々の住民が当事者意識を持って事前の防災活動に取り組むには，災害によって財産・日常生活を失う場面をイメージするよりも，身近な家族を喪う場面をイメージすることが有効と考えられる．また，「どうすれば家族の命を災害から守れるのか」のように保護するとの観点だけでなく，「なぜ家族の命が災害で喪われるのか」のように喪失するとの観点でもイメージすることが有効と言えるかもしれない．

参考文献

1) 片田敏孝・木下猛・金井昌信：住民の防災対応に関する行政依存意識が防災行動に与える影響，災害情報，No.9，pp.114-126，2011.
2) 矢守克也：巨大災害のリスク・コミュニケーション－災害情報の新しいかたち－，ミネルヴァ書房，p.94，2013.
3) 藤本一雄・戸塚唯氏：東日本大震災被災者の証言・体験談に基づく長引く後悔に関する一考察，地域安全学会梗概集，No.34，pp.27-30，2014.